選挙戦での政策論と戦略の現実

４月１日の日本医師会会長選挙は、決選投票で前副会長・横倉義武氏が、前会長・原中勝征氏に192票対164票で勝利した。予想では、大票田の東京、大阪、愛知の支持を得た横倉氏が大差で勝利するものとされていたが、28票差と僅差であった。東京、大阪、愛知も決して一枚岩でないこと、また全国でも横倉氏の立候補に疑問を持っていた代議員が多かったことが判明した。

今回の会長選挙で、両者の日本医師会活動の理念に大きな違いはなかったが、原中氏は任期後半から民主党と自分のつながりを発言することが多く、ことさら民主党との太いパイプを強調していた。今後、民主党とのつながりが強すぎれば、TPP、社会保障、消費税、診療報酬改定等の問題に断固対応できるのか不安を強く感じた。代議員の相当数も同様であったと推察された。

今回の選挙戦の経過は従来の日医会長選と同じく、政策より戦略であった点は、何か後味の悪い不消化でグレーな気持ちにさせられた。今回の選挙も、青柳氏の日医会長選の再現に近く、東京、大阪、愛知の選挙終盤の三者連合結成であった。青柳氏は、日医会長選にマニフェストを提出し政策で戦うことを前面に出したが、大票田地域の戦略に敗れた歴史がある。このような戦略選挙が続けば、会員の医師会離れがますます進んで行くだろう。

前の日本医師会「将来ビジョン委員会」の報告の中に、全会員の直接選挙が提案されている。直接選挙はできないまでも選挙期間を延長し、各会長候補が少なくても地域ブロックに出向き、立合い演説会や討論会等開催して選挙の活発化を図り、会員に対し身近な選挙にしてはどうだろうか。地方医師会も会員の意識低下に苦慮し、医師会を運営することも難しくなっていく。日本医師会は、一案を投じてはいかがだろうか。

（ドクトルジバク）

絆と孤独（立）死

昨年の東日本大震災から１年以上が経過した。日本人の規律の良さや絆の強さが、世界中の人々から賞賛された。私も一日本人として誇らしく思っている（マクロ的には）。

しかし、一方で（ミクロ的に）寒々しい心境になった事件が身近に起こった。平成24年１月20日に発見された二人姉妹の孤独死事件である。自分の施設のごく近所での出来事なので、一層身近に感じたのである。25年前にも同じ区内で同じことが起こっていた。さらに、孤独死のキーワードでネット検索をしてみて愕然とした。全国では、ほとんど毎日のように発生しているではないか。道内でも１月12日に釧路市内のアパートで、老夫婦の遺体が発見されていた。

私の幼い頃は、母が商売をしながら民生委員をしていたこともあって、近所の情報は豊富であったし、時には子ども心にも過剰な「おせっかい」が普通であった。しかし、記憶では孤独死の例はなく、みんな貧しいながらも仲良く暮らしていた。私も近所のおじさんやおばさんに叱られたり、可愛がられたりしながら、晩飯をご馳走になったり、泊まってきたりして、半分は世間に育てられたように思う。

最近の都会では、こんなことを期待しても無理のようである。地域のコミュニティー能力の大幅な低下はいかんともしがたい。己の町内会のお付き合いは女房に任せっきりで申し訳ない次第であり、偉そうなことは言えない。

せめて己の職場の中のコミュニケーションを大切にして、「絆」を大切にする文化を作り上げる努力を、今後も惜しまないようにしたいと考えている。

（狸）